里親制度を知っていますか？

里親とは、さまざまな事情により自分の家族と暮らすことができない子どもを、一時的または継続的に預かり、育てる人のことです。

埼玉県では、一人でも多くの子どもたちが家庭的環境の中で生活できるよう里親を募集しています。
里親制度を詳しくお知りになりたい方は、お問合せください。

埼玉県マスコット
「コバトン」＆「さいたまっち」

埼玉県福祉部こども安全課 発行
電話：048-830-3335

すべての子どもにあたたかい家庭を

里親さんたちの手記

縁あって、ひとつ屋根の下で暮らすことになった家族。
それぞれの家庭にそれぞれの物語があります。
ここに掲載したのは、3人の里親さんたちの体験談です。

彩の国 埼玉県

～２歳の女の子を受託した里母さんの手記～

ママってどんな存在？

夫と２人、不自由なく幸せな生活を送ってきました。ただ一つ心残りは、子どもを授からなかったこと。「ママになりたい」。この夏、児童相談所を通じ、乳児院から２歳の女の子を引き取りました。

突然現れ、「ママだよ」と名乗る大人を、子どもはすぐに受け入れました。むくな目で「ママ」と呼ばれると胸がいっぱいになる反面、少しだけ不思議な気持ちもよぎります。「子どもにとっては覚えやすい言葉。どんな気持ちで私を『ママ』って呼んでいるのだろう」。血のつながりのない私は、何をもってこの子の母なのか。「『ママ』っていつでもどんな時でも、どんなあなたでも、大好きで抱きしめたいと思っている人」。そんな言葉が自然とあふれてきました。

「いつか、この子が思春期になって、血のつながらない私たちの愛情を疑う日が来るかもしれない」。そのときは、このはがきを見せてあげたいと思います。

「ママ」になりたい。
乳児院にいるあなたと私は「縁」があって
もうすぐ家族になります。
あなたは覚えたての言葉で「ママ」って
時々呼んでくれるけど
「ママ」がどんな存在かわかっているかな。
「ママ」って いつでもどんな時でも、
どんなあなたでも大好きで 抱きしめたいと
思っている人だと「ママ」は思っているよ。
神様。
私は未熟な人間ですが
いつの時も ずっと「あなたのママ」で
いられますように。

これは、願い事をはがきに書いて郵便ポストへ投函する「第２回はがき名文コンクール」(2016年)に応募し、佳作を受賞した作品です。募集テーマは「明日への願い」でした。

～小学５年生の男の子（1歳から受託）を養育中 の里母さんの手記～

楽しい日々

１歳の誕生日過ぎから一緒に暮らしはじめ、もう９年が経とうとしています。

彼は知的発達の遅れを伴った自閉症児です。１歳になったばかりの彼は、毎日朝から晩まで泣き続け、ちっとも笑わない、目も合わせてくれない子どもでした。

一番大変なのは夜寝ないことでした。８時頃ミルクを飲ませながらベッドに連れて行くのですが、狂ったように泣き続け、泣き疲れてやっと11時ごろに眠りにつくのです。私たちも、彼がなぜ眠れないのか、楽しそうにしないのか、理由を考えたり、あれこれ試行錯誤してみたのですが、上手くいきませんでした。２歳の誕生日を迎える頃、やっと病院で自閉症という診断をしていただきました。

４歳頃までは、彼の声は「アー」とか「ウー」そして泣き声くらいしか聞くことがありませんでした。彼との意思疎通を図るためにベビーサインや手話なども取り入れてみました。ですが何度サインを出してみても、見ているのか興味があるのかさっぱりわかりません。それでも１か月くらい続けていると、ある時同じサインを彼が使って、私に何かしらを訴えてきてくれたのです。そうやって少しずつ伝える手段を身に付けさせ、「自分の気持ちを分かってもらえるのは嬉しい」「人とのやりとりは楽しい」と思ってもらえるように、日々を重ねていきました。

迷いながらの毎日の中で、素敵な出会いもありました。療育センターの院長先生との出会いです。初めてお会いした日、先生は少し離れたところから彼の様子を観察し「お母さん、この子眠れないでしょう。すごく不安が強い子だね。不安で不安で眠れないんだよ。全身が黒い布で覆われているようだよ。でもね、その布はいつか必ず取れるよ」と言ってくださいました。その言葉にどれだけ励まされたことか。そして先生の言葉通り、小学生になった頃、彼の情緒はぐんと安定し、毎日たくさんの笑顔が見られるようになりました。

先日、赤ちゃんの頃の話になり「君は泣いてばかりで大変だった」と話すと「ママ、育ててくれてありがとう」と思いがけず嬉しい言葉をかけてくれました。そうやって時々、素敵なご褒美がもらえる彼との生活は、大変ながらも楽しい日々です。

～3歳から受託し、現在は社会人となった男性の 里母さんの手記～

成人した君へ

里親登録から１年半。諦めかけた頃、我が家にやって来た君は、色白で、寝ている時以外は片時もじっとしていない元気な子。３歳の誕生日を迎えて間もなく、近くを散歩していると、前からニコニコした高齢の方が近づいてきて「何歳」と聞かれ、君がどちらとも取れる数を示したので、「３歳になったばかりで、まだうまくできなくて」と私。すると君の手を優しく取って、ゆっくりと、薬指、中指、人差し指の順に、何度も何度も伸ばして、ていねいに教えてくださいました。「アッ！」と私。これこそ、子育ての原点のような気がしました。預かって１か月あまり、つい大人の目線で判断。初めての子育てとはいえ、イラついていた自分が恥ずかしくなりました。

５歳から幼稚園へ。園長先生は「まだ生まれて５年しか経っていないのですよ。ママさんたちは期待のしすぎです。もう少し待ってあげてください」と折に触れて注意。君は、１年もの間乳児院にいたのだから、他の子よりさらに「ゆっくり、ゆっくり」と思うことにしました。

小学１年生。担任の先生は、「まずは、お勉強よりも学校が嫌いにならないようにすること」とおっしゃり、本当にヤンチャな子が何を言おうが、叱るときも笑顔。「どうしたら、あの忍耐力が培われるのか」と思うほどの先生で、君も「大好き」と言っていましたね。

高校受験の頃の君は、玄関先に毎年芽を出す自然薯のように、無理に近づこうものなら、危うく切れてしまいそうで、「今が一番大事な時。そっと、そうっと」と、登校する君の背に、何度念じたことか。年々成長しツルを太くする自然薯が「大丈夫、彼の心も少しずつ成長するから」と励ましてくれたような気がします。

成人式を迎えた大学生の君。大学に合格した時、「たくさんの人たちと接することができて、本当によかった」と話してくれましたね。私も、里親として君と共に育った17年の間、たくさんの出会いがありました。成人した君には、これまで以上にたくさんの出会いが待っていることでしょう。君の豊かな感性で吸収し、素敵な人生を送ってほしいと心から願っています。